

栃原岩陰遺跡マガジン

TOCHIBARA ROCK shelter site MAGAZINE



北相木村の考古学最新情報と
考古学界隈のトレンドを紹介するフリーマガジン

CONTENTS

- 特集1 山の弥生遺跡の復権
- 特集2 縄文ブームは…来たのか？
- 研究レポート 「相木の谷の
縄文時代中期土器について」
藤森 英二（北相木村教育委員会）
- 連載 北相木村に呼んでみました
井出 浩正（東京国立博物館研究員）
- 考古学リレーエッセイ
芹沢 一路（長和町文化財保護委員）
- 北相木村考古学ニュース
学芸員のフィールドノート

平成30年度 北相木村考古博物館報

山の弥生遺跡の復権

北相木村の栃原岩陰遺跡は、縄文早期（約10,000年前）の遺跡として知られるが、実はこの遺跡からは、ごくわずかであるが弥生時代の遺物が見つまっている。この弥生時代以降は、日本列島でも水田稲作が重要な生産手段となることは広く知られている。しかし、高冷地ゆえに水田稲作を行う時期が遅れたと考えられる北相木村のような山間地で、なぜ弥生時代の遺物が見つかるのだろうか。そこには、一体どんな秘密が隠されているのだろう。

これまで、とすれば水田稲作を行っていた地域に研究が偏っていた中において、今、私たちは「山の弥生遺跡の復権」を試みてみたい。

縄文ブームの最中 世の中は縄文ブームだそうである。本号の特集2にも記すように、確かに各地で縄文関連のイベントが開かれ、関連の本やグッズも数多く見かける。

しかし、そんな2018年の秋、北相木村考古博物館では、弥生遺跡をテーマにしたイベントを行った。題して「栃原岩陰遺跡フェスティバル2018 教えて馬場さん 山の弥生人て、なにやっていたの?」である。

なぜ、あえてこのような企画を行ったのか。それは、縄文ブームの中でメジャーになる遺物や遺跡がある一方で、その土地その土地の歴史を知る

ためには、誰にも知られていない、教科書にも決して出てこない遺跡を考える必要を感じたからでもあった。

狩猟採集を中心とした縄文時代に対し、弥生時代にお米を作るようになるというのは、おそらく小学生でも答えられるだろう。いきおい研究の対象も人々の興味も、稲作文化が中心となり、それ以外の生活は忘れられがちである。稲作のない土地の研究は、やがて遅れ行く。北相木村も例外ではなく…。しかし、地方の博物館の使命の一つが、その地域の歴史を究明していくことならば、やはりこの時代の研究も、縄文時代同様重要はずだ。



栃原岩陰遺跡フェスティバル2018で講演する馬場氏

弥生時代の佐久地域 さて、上の問題に取り組むには、村内あるいは周辺の弥生遺跡を考えるより他ないが、その前に、今一度弥生時代のことをおさらいしておこう。

弥生時代をごく簡単に説明すれば、それは大陸（韓半島）から水田稲作を伴う文化を携えた人々が流入し、日本列島の各地にその生活スタイルが波及していく時代となる。実際、稲作の開始年代は地域により異なり、さらにそのスタイルが定着しなかった北海道や琉球列島では、本州、四国、九州とは違った歴史を刻んでいく（それぞれ続縄文時代、後期貝塚時代と呼ばれる）。

弥生時代の始まりについては、日本列島でも水田稲作が始まった時期と考えるのが一般的であるが、国立歴史民俗博物館による最新の研究では、福岡県の板付遺跡で確認されるその年代は、およそ3000年前にまで遡るとされる（以下の年代も、同研究成果をもとにしている）。これを弥生早期と呼ぶ。環濠集落も出現し、早くも地域によっては戦争が始まっていたようだ。

続く2800～2300年前頃は弥生前期と呼ばれ、青銅器が使われ始めるのがこの時期である。また瀬戸内地方や近畿地方でも水田稲作が始まる。そこからおよそ2000年前までが、弥生中期となる。鉄器が出現し、後半には水田稲作が南関東にまで及ぶ。また、青銅製の前漢鏡が墓に副葬されるものこの頃からとなる。

紀元前後から西暦250年（約1760年前）が、弥生後期である。中国の歴史書にも、日本列島の記述が現れる。福岡県志賀島で江戸時代に発見された漢委奴國王の金印もこの時期のものだ。また、有名な邪馬台国の女王卑弥呼は、この時期の終末期の人である。

北相木村を含む佐久地域では、弥生前期から中期前半にも少数の遺跡は見られるが、どれも小規模。中には佐久穂町の中原遺跡や館遺跡のように、再葬墓に用いる土器棺が発見されている例も含まれる。

中期後半にのって、現在の佐久平付近の低湿地を望む台地や段丘上、田切地形的上段などを中心に規模の大きい遺跡が出現し、正に集落と呼ぶに相応しい様相を備える。特に後期では遺跡数が急



本文に登場する弥生遺跡

増し、方形（円形）周溝墓と呼ばれる、やや大きな墓も作られるようになる。

また、実際佐久市内、特に現在の岩村田や長土呂付付近では、弥生時代中期後半以降の重要な発見例が多い。例えば、県下で初めて見つかった環濠集落である西一里塚遺跡をはじめ、多数の住居址を持つ遺跡も多く、北西の久保遺跡では中期後半で92軒、後期でも38軒の住居址が確認されている。西近津遺跡では多数の住居址の中に、長軸18m、短軸9.5mの後期の超大型堅穴住居址が含



栃原岩陰遺跡出土の弥生土器。下段左側は弥生前期の土器、上段は中期後半から後期土器の底部破片と思われる。



小海町天狗岩岩陰遺跡。栃原岩陰遺跡と同様、相木川右岸にある岩陰遺跡。弥生時代の豊富な遺物が見つかった。

まれていた。西一里塚遺跡では、鉄釧（腕輪）や鉄剣が、上直路遺跡では国内最多の15点の銅剣が出土するなど、金属器も点在している。

また、千曲川を降り善光寺平などでも弥生遺跡は多いが、特に後期後半では箱清水式と呼ばれる赤く塗られた土器が使われ、佐久もこの分布圏に入る。

このように、概ね中期後半以降は、佐久地域も水田稲作文化の影響下にあったと言えるだろう。尚、水田跡としては佐久市平原の濁り遺跡があるが、集落の位置などから、当時の水田は標高約800m以下に作られたと考えられている。

北相木村周辺の弥生時代 今見てきたように、佐久平付近では、弥生中期後半には本格的な稲作文化が始まっていたと言えるだろう。では、こ北相木村周辺ではどうだろうか？結論から言えば、北相木での稲作が文献で確認されているのは、江戸時代になってからの1676年。それ以前にも水田があった可能性はあるが、寒冷な気候の当地では、弥生時代には稲作が行われなかったと考えるのが妥当であろう。

にもかかわらず、冒頭で述べてように、栃原岩陰遺跡では弥生時代の土器が発見されている。前頁の写真がそれであるが、下段左は糸痕文と呼ばれる土器の破片で、縄文時代終末の晩期水Ⅰ式に続く水Ⅱ式である。先の説明では、弥生前期にあ

たる。写真上段2点は、弥生時代中期後半～後期の土器の破片。細かな時期の特定は困難であるが、佐久平周辺でたくさん大きな集落が築かれた時期に相当する。

このように、栃原岩陰遺跡ではごくわずかではあるが弥生前期、また中期後半もしくは後期には、人が訪れていた痕跡が残されているのである。また近隣では、1km下流の小海町天狗岩岩陰遺跡の発掘調査で、特筆すべき発見が続いている。この遺跡は栃原岩陰遺跡と同じく、八ヶ岳起源の火山砕屑岩層（千曲川泥流）が河川で削られてできた岩陰地形で、加工痕を持つ鹿角を含む骨類、弥生時代中期後半から後期と思われる土器片などが発見されている。灰層や焼土も確認されており、部分的な調査であるが、大きな成果を上げている。

語られた北相木村周辺の弥生時代 そんな状況の中、2018年10月の栃原岩陰遺跡フェスティバルでは、弥生時代の専門家である、岐阜県下呂市教育委員会の馬場伸一郎氏をゲストに迎え、山の弥生遺跡の謎に迫った。馬場氏は埼玉県出身であるが、弥生時代に興味を抱き、以前は長野県内にも住みながら、佐久の弥生遺跡にも深い関心を寄せている。そんな馬場氏は、上に書いた弥生時代や佐久地域の事例を紹介しつつ、北相木を含む山間部の遺跡について、思うところを語ってくれた。その中では、平地の弥生遺跡に勝ると

も劣らない、山間部の遺跡の重要性が述べられたのである。

まず馬場氏は、山間部の弥生遺跡として、前期から中期前半については墓地としての利用の例をあげた。佐久市前山の月明沢遺跡は、絶壁に近い崖面にある小さな岩陰遺跡であるが、前期の糸痕文土器とともに焼かれた人骨や穿孔された人歯が出土し、再葬墓関連の遺跡と指摘する。またこのような岩陰を利用した再葬の例は、群馬県東吾野町の岩嶺山遺跡でも確認出来るといふ。ただし、この時期のしっかりとした集落の発見は、佐久地域では未だなく、これは今後の課題といえよう。中期後半以降では、小海町天狗岩岩陰遺跡などを例に、狩猟した動物の解体場所の可能性を上げた。さながら、狩猟時のキャンプサイトといったところだろうか。またこれに関しては、佐久市西近津遺跡で見つかった二本ツジカ（角座のある鹿角等を含む）が、平地と山間部の遺跡を結びつける重要な遺物とも指摘している。

また馬場氏はこの他にも、佐久地域の土器からコメ以外の作物、アワやキビの圧痕があることを報告し、稲作一辺倒と思いがちな当時の生活のイメージに、一石を投じている。

さらに、当日は都合により出席頂けなかったものの、佐久の弥生時代研究の第一人者である小山岳夫氏からは、以下の内容のコメントが届いた。それは、栃原岩陰遺跡など後期の山間部の遺跡が、丹後半島から北陸経由でもたらされた可能性のある鉄やガラス製品の流通に関わりがあることを指摘するものであった。

いずれにせよ、水田に適さない高冷で山がちな北相木村付近も、やはり他の地域と無関係ではなく、いやより正確に表現すれば、平地の集落だけで人々の生活が完結していたわけではなく、山の遺跡での行動も、彼らの生活の一部であったことが明らかになっつつあるのだ。



佐久市月明沢遺跡。崖面の狭い岩陰であるが、弥生前期前の再葬墓関連の遺跡と思われる。

確かに山間部の弥生遺跡は遺物の量も少なく、研究の軸足がより大きな集落、近隣で言えば佐久平周辺部に置かれるのは当然である。そしてそれゆえに、これまで忘れられがちであった山間部の弥生遺跡であるが、今後はこれらを含めた研究を進めないことには、弥生時代の生活を再現するのに不十分ということになる。

まだまだ課題は多い。しかし、身近な遺跡を歴史の大きな流れの中で考えることができれば、そこには私たちの研究の意義が見出せる。そしてそれは、当時の人々の暮らしそのものなのだ。正しく「山の弥生遺跡の復権」である。

.....JOMON JOMON JOMON.....
JOMON JOMON JOMON.....
JOMON JOMON JOMON.....

2018年7月～9月。東京上野公園内にある国内最大規模の歴史系博物館である東京国立博物館（トーンパーク）では、特別展「縄文ー1万年の美の鼓動」が開催され、全国各地から選りすぐりの縄文時代の遺物、およそ200点が展示された。その中には5つの国宝土偶と新潟県十日町市の火焰型土器が含まれ、縄文時代の国宝勢揃いという圧倒的な内容だった。

.....JOMON JOMON JOMON.....

長野県内からも茅野市の国宝土偶「縄文のビーナス」と「仮面の女神」をはじめ、重要文化財である御代田町川原田遺跡の焼町土器や南箕輪村の神子柴遺跡の石槍が出品され、さらに北相木村のある佐久地域でも、川上村大深山、小海町中原、佐久月夜平の各遺跡から、土器や石棒などが展示された。

来館者は当初の予想を大きく超えて、延べ35万人以上となった。縄文時代の企画展としては破格の人数を数え、やはり注目を浴びたことは



上野駅前になびく縄文の文字



近年出版された縄文関連の書籍

間違いない。

.....JOMON JOMON JOMON.....

またこの間、いくつもの雑誌やテレビ番組でも縄文時代が取り上げられ、メディアには「縄文」の文字が飛び交った。

しかし、これは突然の現象ではなく、ここ数年、サブカルチャーとしての「縄文」に関心が高まっていた。前号にも登場して頂いた「土偶女子」こと譽田亜紀子氏の著作もそうであるが、2015年の増刊号以降、すでに9冊が刊行されたフリーペーパー「縄文ZINE」はその代表例だ。

また地元の縄文土器を観察し、それらの土器の文様を付けたクッキー（名付けて「ドッキー」・考案者下島綾美）を作るといった体験プログラムなど、新しい試みもなされている。

そして、縄文時代の愛好家や研究者が出演する、山岡信貴監督のドキュメンタリー映画「縄文にハマる人々」も、各地で上映され好評を得ている。

.....JOMON JOMON JOMON.....

川原田遺跡の焼町土器が展示されている北佐久郡御代田町の浅間縄文ミュージアムでは、確実に来館者が増え、2018年度には、2003年の開館以来、最も多い来館数（3月現在でおおよそ40,500名）が見込まれている。また客層にも変化があり、これまであまり見なかった、若い世代の女性客が増加したという（堤隆館長によるご教示）。

本館（北相木村考古博物館）でここ数年の入館者数を追ってみると、2015年度が695人、2016年度が716人、昨年2017年度数が708人であったのに対し、2018年度は744人であった。ただし、増加しているものの、それがブームの余波かどうかは判断が難しい。

長野県では、長野8市町村、山梨6市の縄文関連遺物などが「星降る中部高地の縄文世界」として、日本遺産に認定された。各種イベントも好評を得ているようで、今後縄文をテーマに県内を訪れる人は、ますます増えるかもしれない。

.....JOMON JOMON JOMON.....

だが、一方的な縄文の消費を危惧する向きもある。縄文時代と一言で言ってしまうことで、まるで縄文時代が一万年以上も安定的に続いた時代、あたかもユートピアのように語られることがしばしばある。しかし実際は、私たちはいくつもの理由から、一万数千年前から二千五百年ほど前の日本列島を「縄文時代」と呼んでいるに過ぎない。しかもその定義によって、年代や地域の範囲は異なるのだ。実際「縄文時代」という言葉が定着したのは、戦後になってからでもあり、それが不変の概念であるわけではない。

.....JOMON JOMON JOMON.....

しかし確かなのは、トーンパークの展示で各地に散らばっていた縄文遺物を一度に目にし、驚嘆の声を上げた人が多かったことだ。



数々の縄文グッズ。有名な土器や土偶がズラリ

今トーンパークで展示されていたものの多くは、実はそれぞれの地域の博物館などで、普段から目にするものの出来ものであるが、やはり東京にそれが行った意味は大きい。それをきっかけに地方の博物館や資料館を訪れる人は増えたはずだ。

いわば、ボールは投げられたのである。縄文時代に対する正しい理解と、その息吹が全国各地で見られることを伝えるのは、私たち、地域の博物館の務めであろう。

今こそ、地方の博物館が力を発揮すべき時なのかもしれない。そして、たとえブームが来ようと去ろうと、その志しは、変えてはならないのである。

.....JOMON JOMON JOMON.....

.....JOMON JOMON JOMON.....

.....JOMON JOMON JOMON.....



浅間縄文ミュージアムで開かれた「ドッキーワークショップ」。土器文様をクッキーとして再現。もちろん美味しい。

相木の谷の縄文時代中期土器について

藤森 英二

はじめに

言うまでもなく、長野県内では縄文時代、中でも中期の遺跡が多い。それゆえ土器の編年研究についての蓄積もあり、1960年代の所謂「井戸尻編年」（藤森他1965）で骨組みが示されて以降、「昭和40年代は井戸尻編年の提示と問題の提起、50年代は資料の増加にともなう編年上の若干の修正、60年代前後からは方法論的修正をともなう再整の時代」とまとめられている（三上1999）。そして現在は、その細分や地域ごとの変遷を整えつつ、俯瞰的な位置付けを進めるながら地域間交流を考える段階でもある（三上・藤森2012、綿田2013a）。

北相木村を含む東信地域でも、中期中葉の焼町式や、後葉の野土式を軸とした独自の編年が組まれ（寺内2004、綿田2008、藤森2013等）、現在ではそれらの地域間交流に論が及ぼうとしている（寺内2012、綿田2013b、水沢2014等）が、さらに地域を絞り現在の南佐久郡、すなわち千曲川最上流域を見ると、古くは八幡一郎の研究（八幡1929）や島田恵子による論述はあるもの（島田1998）、今日的な視点でその実態に迫った考察は少ない。筆者は過去に、北相木村において発掘調査により得られた坂上遺跡の資料を用いて、その前半期における土器編年の予察を試み（藤森2006）、またその後南相木村見上遺跡出土の中期後葉から末期の土器を報告する機会にも恵まれた（南相木村教育委員会2016）。

本論では、未だ不完全ではあるものの、相木の谷を中心に千曲川最上流域の土器を俯瞰してみた。



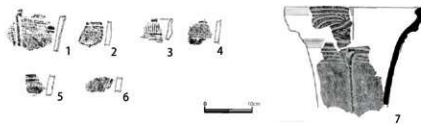
第1図 遺跡位置図

1. 中期前葉 (第2図)

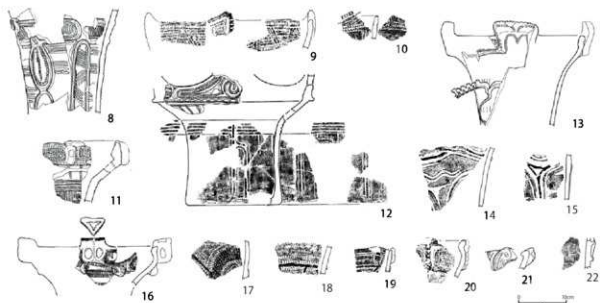
関東の編年では五領ヶ台式、井戸尻編年では九丘箱尾根式期に該当する。この時期の土器としては、坂上遺跡から小破片が、栃原岩陰遺跡の1983年調査区からは、大型の破片が出土している。

資料番号1～6は坂上遺跡出土の資料。1は五領ヶ台式、2～4は半隆起線文が見られ、寺内が東信系土器とするもの、あるいはその前段階のものとした。5・6は半隆起線文の脇には刺突があり、北信地域に多い深沢式であろう。7は栃原岩陰遺跡の資料、図上復元が可能で、五領ヶ台式といえよう。

またこの時期では、八ヶ岳東麓に位置する小海町の穴沢遺跡や小原遺跡で良好な資料が出土している。中でも穴沢遺跡はこの時期単独の遺跡で、復元可能な個体も多い。



第2図 中期前葉土器 (S=1/8)



第3図 中期中葉土器 (S=1/8)

これらも含め、半隆起線文を用いたもの（東信系土器）に先行する土器）が多く、これらに五領ヶ台式や深沢式が混在するという状況である。

2. 中期中葉 (第3図)

所謂勝版式、あるいは井戸尻編年で言う落沢、新道、藤内、井戸尻式の各期に相当する。

北相木村内では、坂上遺跡の発掘調査では図上復元可能な土器も含めて一定量が、栃原岩陰遺跡でごく少量が出土している。

8～21は坂上遺跡のもので、8は「東信地域で成立した」（寺内2004）とされる後沖式土器である。これに対し9、10は落沢式である。いずれも角押文が見られ、この期の特徴を示している。また、勝版・井戸尻系土器と千曲川流域の土器との折衷と思われる土器（11・12）もある。器形や口縁部文様帯の構成は落沢式の範疇であるが、横位に並行する半隆起線以下の胴部は、縄文地文で角押文と半隆起線によるクラック状モチーフが底部にまで伸びている。これは、千曲川の中流から北陸地方の土器に見られるものを思わせる。

また坂上遺跡では、阿玉台1b式土器も出土している（13）。これについては、井出による詳しい考察がある（井出2018）。

やや時期が下ると、焼町式古段階（14、15）も見られるが、数量的には16のような新道式・藤内1式が多数見られる。17は所謂抽象文の一部。18、19はやや新しいと思われる。また阿玉台II式（20）も少数ながらみられる。

藤内II式から井戸尻式になると、坂上遺跡では出土

数が極端に減るが、やはり勝版・井戸尻系土器が多いと思われる。焼町式は、破片が1点認められたのみである（21）。栃原岩陰遺跡でも、この時期の小破片が数点出土している（22）。

3. 中期後葉 (第4図)

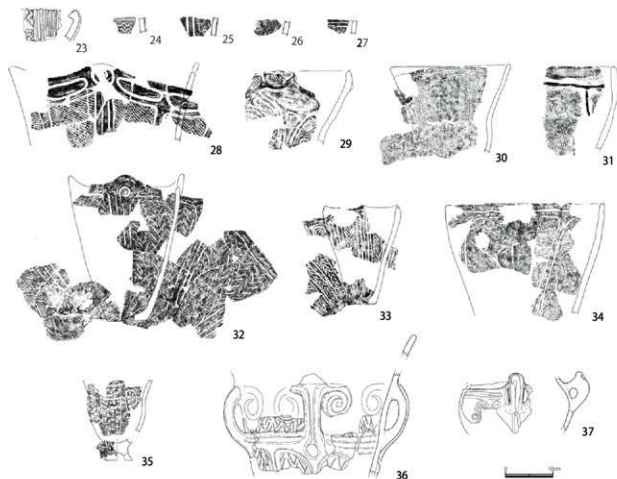
長野県内では、最も遺跡の多くなる時期であるが、現在のところ北相木村内で遺物の発見数は少ない。坂上遺跡での発掘調査でもわずかな土器片が出土したに過ぎない。23は後葉初めの梨久保B式、24は曾利2式であろう。25、26は後半期の曾利3～4式、27は関東南部を中心に分布する連弧文土器の口縁である。

尚、坂上遺跡では、胴部が一周する唐草文系土器の樽型の深鉢（理髪とも考えられる）や、後葉期の釣手土器の釣手部なども見られ（本誌11頁参照）、今後の調査如何では、さらなる発見はあるかと思われる。

中葉後半から末にかんしては、2012年に南相木村の見上遺跡が発掘調査され、やまとまつた土器群が出土した（南相木村教育委員会2016）。28は関東地方の加曽利E III式、29はやや東北の大名木の式の影響もあるろうか。30、31は同IV式であろう。

一方、32～34は山梨方面に多い曾利V式。35は器台をもつ土器である。時期の特定は難しいが、中期末としておきたい。

36、37は取手を有する資料で、器形の差異はあるが、いずれも曾利IV～V式と言えるだろう。



第4図 中期後葉土器 (S=1/8)

4. 他地域との関係

以上、今一度概要をまとめると、中期前葉では、五領ヶ台式と東信系、深沢式が混雑する状況。これは現在のところ、東信地域全体を包んだ千曲川上流域全体の傾向と言える。

中葉になると、やはり千曲川流域もしくは東信地域に見られる後神式土器や焼町式といった、曲隆線文が主体の土器が含まれるものの、山梨や南信地域あるいは埼玉、群馬両県西部からの影響だろうか、畷沢式以降、新道、藤内、井戸尻（もしくは勝飯式）の諸型式が見られ、数において拮抗、あるいは上回っており、勝飯・井戸尻系土器がより主体性を持って存在したと思われる。また井出が指摘するように、群馬県西部との繋がりが強い阿玉台1b式が認められる。

尚、焼町式とその前段階に関しては、北陸や関東地方との関連を考える必要もある（山口2008、長澤2018等）。

後葉期についても、山梨方面の曾利式、もしくは関東地方の加曾利式が主体的で、浅間山麓に多い郷土式が色濃く分布する佐久平（旧旧田町）以北とは違った様相を持つことが予想される。また1点のみである

が、関東南部に分布する連文土器も認められた。さらに上流の川上村大深山遺跡では、従来言われている通り曾利式が多く（高田1998）、より山梨方面との繋がりが強いと思われる。

以上のように、本地域では東信地域独自の土器も見られつつも、旧旧田町以北や浅間山麓とは異なり、より関東や山梨方面との繋がりが強いことが予想されるのである。

おわりに

駆け足で該当時期の土器を追ったが、紙面の関係もあり、提示できた資料も少なく記述も簡略的である。それぞれの詳細は、調査報告書や参考文献を参照されたい。

また北相木村では、今回あげた発掘資料以外に、坂上遺跡や宮ノ平遺跡、カワト沢遺跡で多量の採集品もあり、いずれ改めて資料化しながら、この時期の内付けをしていきたい。叶うならば、若い研究者に未発表資料の発表を担ってもらい、共に地域の研究に貢献したいところである。

主な参考文献

- 井出浩正 2018 「旅する縄文土器」『北相木村考古博物館報』Vol.1
 北相木村教育委員会 1984 「栃原岩陰遺跡発掘調査報告書-昭和58年度-」
 北相木村教育委員会 2003 「坂上遺跡」
 桜井秀雄 2012 「東信地域における縄文時代中期の様相」『長野県考古学会誌』143・144合併号
 島田恵子 1998 「第四章 縄文時代」『南佐久郡誌』考古編
 寺内隆夫 2004a 「千曲川流域の縄文時代中期中葉の土器「焼町土器」および北関東地域との関係をめぐって」『国立歴史民俗博物館研究報告』120集
 寺内隆夫 2004b 「千曲川流域における火焔型土器および曲隆線文の系譜」『火炎土器の研究』新潟県立歴史博物館
 寺内隆夫 2012 「土器装飾にみる差異の顕在化と中期文化の繁栄」『長野県考古学会誌』143・144合併号
 長澤肇生 2018 「火焔型・玉冠型土器出現前夜の様相-五ノ歩式土器設定の試み-」『津南学叢書』第35輯 津南町教育委員会
 藤森栄一編 1965 「井戸尻」中央公論美術出版
 藤森英二 2006 「北相木村坂上遺跡の縄文時代中期

中葉土器」『長野県考古学会』114号

- 藤森英二 2013 「東信地域における縄文時代中期土器の動態」『文化の十字路口 信州』日本考古学協会
 三上徹也 1999 「中部地方中期（畷沢式-井戸尻式）」『縄文時代10 縄文時代研究100年』
 三上徹也・藤森英二 2012 「長野・山梨両県の中期中葉土器について-現状と課題-」『長野県考古学会誌』143・144合併号
 水沢教子 2014 「縄文社会における土器の移動と交流」(株)雄山閣
 南相木村教育委員会 2016 「見上遺跡」
 八幡一郎 1929 「南佐久郡の考古学的調査」
 山口逸弘 2008 「新巻・焼町系土器」『総覧縄文土器』小林達雄監修(株)アム・プロモーション
 綿田弘実 2008 「郷土式・丘原線文・大木系土器」『総覧縄文土器』小林達雄監修(株)アム・プロモーション
 綿田弘実 2013a 「長野県における縄文時代中期中葉土器群の分布状況」『文化の十字路口 信州』日本考古学協会
 綿田弘実 2013b 「長野県北東部における縄文時代中期中葉土器群 千曲川・下流域の地域差・唐草文系土器との交流」『第26回縄文セミナー 縄文時代中期中葉土器研究の現状と課題』

坂上遺跡の釣手土器

これまで未発表だった、坂上遺跡で発見された釣手土器を紹介します。

北相木村坂上・中尾地区の坂上遺跡は、これまでにも縄文時代の遺物が数多く発見されていますが、実はその中に「釣手土器」と呼ばれるものの破片があります。これはお椀のような形状の上に、大きな複数の窓を持った特殊な土器で、縄文時代のランプという説もあります。

坂上遺跡の例は、発見の経緯は不明ですが、釣手土器の天井部分と思われ、大きな窓が3つ空いた形をしていたようです。内側には焦げた跡があり、確かにランプのような使い方も想像されます。縄文時代中期後半、およそ5000年前のものでしょう。

北相木村考古学ニュース



北相木村に呼んでみました



佐久の土器 多くない？

佐久市出身で、現在は東京国立博物館の研究員として活躍する井出浩正さん。実は縄文ブームの火付け役の1人でもあり、長年、北相木村の考古学にも大きく貢献してくれた人物です。今回は、どんな話が飛び出すでしょうか。

具体的に明らかになった。

またそれ以降、2007年頃から、仲間の皆さんを率いて、栃原岩陰遺跡の遺物整理作業に何度も来て頂きました。それも含めて、北相木村の印象はどうですか？

井出: 私も大学院生の頃からこれまで栃原岩陰遺跡の出土資料の整理作業には何度も参加させていただきました。ずばり、宿作業は本当に素晴らしいですね！

例えば、普段はなかなか会って話すことができない他の大学の皆さんや、同じ大学でも年の離れたり、専門や分野が異なったりする後輩たちと共同で作業をしたり、議論したり、覆食を共にするのは、なかなかできない貴重な経験だと思います。そうしたコミュニケーションが考古学にはとても大切であり、そこから広がる輪が、その後の人生に大きく関わって行くことも多いのではないかな、と思いますよ。私も、最初に北相木村考古博物館に見学に来た時は、まさか藤森学芸員とこんなに長くお付き合いさせて頂くことになるとは全く想像していませんでしたし(笑)。でも、何より北相木村で和気あいあいと一緒に過ごすのは、とても楽しいですね。

F: ありがとうございます。確かに付き合い長くなりましたねえ(笑)
それと、普段の会話の中で、北相木村の考古学研究のこれからの課題も仰って頂いています。改めてお願いできますか？

井出: 今回、北相木村はおろか、日本を代表する縄文時代の岩陰遺跡のひとつである、栃原岩陰遺跡の発掘調査報告書が刊行されると聞いています。内陸ではとても珍しく、土器や石器以外にもたくさんの動物遺存体などの有機物が検出されています。ツノガイやタカラガイの装飾品のように、海辺から持ち込まれたものもあります。また、土器や石器も、北相木村内に似たようなものがあるのか、未発見の遺跡が眠っているのではないかと、とても気になりますね。
さまざま方と一緒に、遺跡を探し発見する



2019年栃原岩陰遺跡整理作業

喜びや楽しさ、奥深さからはじまる、栃原岩陰遺跡の研究をさらに進めるための新たな考古学を学ぼうができたなら素晴らしいなあと思います。私たちがかつてそうだったように、学生を中心とする次世代の考古学を学ぶみなさんに学びの場を提供してほしいですね！
どうでしょう、藤森さん？

F: え!? が、頑張ります。

それから、縄文ブームと言われる中で、号の特集でも触れていますが、井出さんも担当された、トーハクの特別企画展。ズバリ、手応えはいかがでしたか？

井出: おかげさまでもちまして、35万人を超えるお客様にご観覧いただきました。皆さんの「縄文時代愛」のたまものではないでしょうか。本当にありがとうございます。でも、これをただのブームで終わらせてしまうのはもったいないですね。こうした世の中の動きにどのように向き合い、手を携えることができるのか。縄文時代を研究するおひとりおひとりにとって、まさにこれからが本番なのではないでしょうか。藤森さんからお借りした縄文人フィギュアも大人気でした。

F: フィギュアについては、本誌でもちょっと触れてます(笑) それより、佐久地域の遺物、多かったですよね？

井出: そ、そんなことはありません。まだまだご紹介したい作品がたくさんありますから(笑)。でも、今回の展覧会が佐久のことも知っていただく何か



2015年栃原岩陰遺跡整理作業

の機会になったとしたら、佐久出身の私としては、とてもうれしいですね。

F: 最後に、何か一言。

井出: 北相木村考古博物館に見学したことがきっかけとなって、これまで教育委員会や役場の皆様をはじめ、村内のたくさんの方々が大変世話になってきました。いつでも私たちを温かく迎えてくださり本当にありがとうございます。この場をお借りして深く御礼申し上げますとともに、これらも考古学を学ぶ若者たちの「ゆりかご」として、どうぞお願い申し上げます。

思わぬ課題も頂きましたが、縄文研究の最前線におられる一人が、こうして北相木村に関わりや関心を持って頂いたのは、村の大きな財産と言えます。これからも若い研究者の「兄貴分」として、ご活躍ください。



2019年 宿で行われた勉強会にて(まじめに話を聞いています)

今日はこの人 井出 浩正さん



学芸員 F: こんにちは。お久しぶりです。

井出: いや、そうでもないと思います？

F: ですね。いつも色々ありがとうございます。
井出さんは佐久市のご出身で、ご自分の研究で縄文土器(縄文時代中期の阿玉台式土器)を調べていた際、当館にお出で頂いたんですね。かれこれ20年くらい前です。

井出: そうですね。展示室内に陳列されていた坂上遺跡出土の阿玉台式土器をたまたま見つけたのがきっかけでした。その成果はこの冊子の前号にも紹介させて頂きました(「旅する縄文土器」北相木村考古博物館1号)。簡単にまとめる、どうやら坂上遺跡で出土した阿玉台式土器のふるさは群馬県西部にあるようなんです。

F: なるほど。山深い北相木村も、人々の動きの中にあつたところですね。それが井出さんの研究で、



2013年栃原岩陰遺跡整理作業

山に残された海の記憶 ～北相木の縄文遺跡をとおして～

むかし

むかしの秋も深まったある朝。肌寒い相木川の川原に男が1人立っていた。「今年は、サケがたくさんくるのだろうか?」不安が男の脳裏をよぎる。そして、男は祈るようにサケがやって来るであろう下流を見続けるのであった。と、これはあくまで私の想像の世界です。今、相木川を含めた千曲川流域ではほとんど海からサケが上がってくる事はありません。

しかし、その昔千曲川には秋になるとたくさんのサケがその姿を見せました。

北相木

の栃原岩陰では約8,000年前の地の層から押型文土器と一緒にサケ・マス類の背骨が出土しています。栃原岩陰の縄文人達にとってサケ・マス類は、これから訪れる厳しい冬を乗り越えるための、重要なたんぱく源となっ

ていたでしょう。栃原岩陰だけでなく前田耕地遺跡(東京都)等の発掘調査から東日本の縄文人がサケ・マス類を捕獲して食料にしていた事もわかっています。

私は以前に北海道網走市にある北方民族博物館で、アイヌ民族が使用していたサケの魚皮製の靴を見たことがあります。もしかしたら栃原岩陰の縄文人もサケを食べるだけでなくこの様な利用したのかも知れません。

さて、栃原岩陰で縄文人達がどのくらいのサケを捕獲し消費したのかは残念ながらわかりませんが、時代が下った奈良、平安時代の史料にそのヒントがあります。奈良時代の都であった平城京から出土した木簡には「信濃国埴科郡鉦御贖四六隻」と書かれていました。この木簡は鉦が朝廷に献上された際に奉札として付けられたと考えられています。また、平



栃原岩陰遺跡出土のサケ鱈の椎骨

安時代中期に編纂された「延喜式」の中で信濃から納められた物品の中に、鉦楚割(干肉を細かくさいたもの)、氷頭(頭部の軟骨)、背籠(背骨の軟骨を塩辛にした物)、鉦子(すじこ)とサケを材料とした物があります。信濃は内陸部にありながら、越後、越中、越前、若狭、丹後、但馬などの日本海側の国々と同じように、サケやサケ加工品の貢進国でした。つまりサケは信濃の特産品だった事がわかります。そんな、サケたちも大正時代以降の相次ぐ水力発電所開発の影響等でその姿は激減し、往時のように秋に群発をなして上ってくる光景は幻となってしまいました。

日本海

から来たものはサケだけではなくありません。北相木では興味深い縄文土器があります。それは坂上遺跡から出土した縄文時代中期のある土器です。縄文土器は、時代や地域によって土器の文様や器形に違いがあります。坂上遺跡から出土したその土器は、上半分が地元で描かれる文様で、下半分が北陸地方で描かれる文様で構成されています。前号で井出浩正さんが同じ坂上遺跡から出土した阿玉台式土器について書かれています。この阿玉台式土器は縄文時代中期の太平洋側で使われた縄文土器です。この様に坂上遺跡は海から遠く離れた山の山奥ですが、両方の海と深い交流があった事がわかります。また、栃原岩陰遺跡でも日本海側のサケの骨だけでなく、太平洋側で採れた

芹沢 一路

Serizawa Kazumichi



坂上遺跡の土器

と考えられるタカラガイなどの貝類が出土しています。これらの貝類は、装飾品として縄文人に利用されたと考えられています。

活発

であった縄文時代の山と海との交流は、やがて土の中に埋もれていき長い年月の間に人々の記憶から消えていきました。私は、そんな喪われた記憶を探り思い出させる学問が「考古学」だと考えます。皆さんも喪われた山と海の記憶を思い出しに北相木村考古博物館に来ていただけたらと思います。

では、栃原岩陰の縄文人達がサケの大漁を祝い満月の下で、焚火を囲みながら歌い喜ぶ姿を思い浮かべながら山の縄文人と海の繋がりのお話を終わりたいと思います。



芹沢 一路 (Serizawa Kazumichi)

1982年、現在の長和町に生まれる。別府大学文化財学理科蔵文化財コースで考古学を学び、卒業論文では長野県東部から群馬県に展開する縄文時代中期の焼町土器を取り上げている。卒業後は企業勤務の傍ら、2010年から長和町文化財保護委員を務め、地元の文化財保護や普及活動に尽力している。地域の歴史に対する造詣は深く、縄文時代から古代中世さらには近世と、その守備範囲は広い。特に戦国時代は得意分野。

密かに展示・縄文人のフィギュアとは？

北相木村考古学ニュース

東京国立博物館の特別展で展示された「縄文人の模型」6点が、北相木村考古博物館にて展示されています。

当館の学芸員の密かな趣味、それは石粉粘土を使った模型作りです。主に恐竜などの古生物や、ワジラやライオンといった野生生物を作りますが、専門を活かし、縄文時代の人間の模型も作っています。

実は本誌の特集でも紹介した、東京国立博物館の特別展「縄文—1万年の美の鼓動」では、新作を交えた6点の模型が、全国選りすぐりの縄文遺物の合間に展示されていました。

現在、これらは当館の入口ロビーに展示されています。ここでは写真もOKです。是非ご覧ください。



北相木村考古博物館で展示中の 縄文人フィギュア

学芸員のフィールドノート

北相木村 考古博物館報第2号「TOCHIBARA ROCK SHELTER SITE MAGAZINE」Vol.02。前号から引き継いだものと、新たな試みとを

織り交ぜて編集してみました。いかがでしたでしょうか？

今号では、全体として「縄文ブーム」がキーワードになっています。東京国立博物館の特別展に前後して、訪れたとされる縄文ブーム。その捉え方は様々ですが、ブームであろうとなかろうと、遺物を保存し、地道に研究重ね、その成果を伝えていくのが、地域の博物館の使命であることには変わりありません。

そして「縄文ブーム」の中、2018年の当館のイベントであえて「弥生時代」に着目したのは、改めてその使命を確認したいという思いと、ブームに逆らうROCKな心意気、からでしょう。ROCKマガジンは、時代に媚びない記事を目指します。

最後は前号とほぼ同じ言葉で。考古学も博物館活動も、決して1人では出来ません。

これからもたくさんの仲間と、そして地域の皆さんと、遠い先祖の声を拾う旅を続けていければと思います。

北相木村考古学博物館学芸員 藤森 英二



北相木村考古博物館

〒384-1201
長野県南佐久郡北相木村2744
☎ 0267-77-2111
<http://vill.kitaaki.nagano.jp/museum/>

平成30年度 北相木村考古博物館報
栃原岩陰遺跡マガジン vol.02

平成31年3月刊行

企画編集 藤森 英二
(北相木村考古博物館学芸員)
発行 北相木村教育委員会
印刷 中澤印刷株式会社